

精読授業にグループワークを取り入れる可能性 —言語学習観の観点から—

楊 峻

1. はじめに

精読授業は中国の大学の日本語専攻の主幹科目であり、大きな役割を果たしている。本来、日本語運用力を育てることが目標としているが、教師主導の下で文法学習を中心に進められている。このような現状のもとで、「言語運用重視、学習者中心とする授業に変えよう」の声が日々高まっているが、実証的な研究はまだ少ない。本研究は、日本の日本語教育現場で行われているグループワーク（以下はGWと称する）の学習形態を精読授業に導入するのを試みる。

2. 先行研究

GWは少人数の学習者が一つの課題を達成するために、協同的に働くグループ形態の学習活動である(Cohen 1986)。本研究はGW取り上げる理由は二つある。一つは学習者は能動的に学習に参加できること、もう一つはインターアクションを生起させ、第二言語習得を促すことができるからである。だが、GWのような新たな学習活動を授業に導入する際、直面する最大の問題は学習者の持つ強固な言語学習観だと言われている(岡崎 1996)。

言語学習観は学習者が言語学習に対して意識的、無意識的に抱いている態度や意識である(板井 2000)。中国人学習者に対して、教師主導型の授業を好み、学習者中心の学習活動に向いていないという典型的な見方があるが、最近の研究報告から、中国人学習者は「非・教師主導型志向が存在している」という結果も出されている(山本 1999; 白杵 2000)。このような研究結果から、彼らの言語学習観は一枚岩ではなく、両面性があると推測できる。また、「中国人学習者が学習者を中心とする活動に向いていない」と言われている背景には、このような経験が少ないということも考えられる。学習者中心とする活動を体験して、中国人学習者はどんな反応を示すか。そこには彼らが今まで受けてきた教

育で形成された言語学習観に大きく関わっていると予測できる。では、中国人学習者は実際にGWの活動を体験して、彼らの言語学習観にどんな影響が見られるか。このことを明らかにすることによって、GWを精読授業に取り入れる可能性を探りたい。

3. 研究目的と課題

本研究は「GWの経験が言語学習観に及ぼす影響から、GWを精読授業に取り入れる可能性を探る」ことを目的とし、以下の研究課題を設定した。

課題1：学習者はどんな言語学習観を持っているか。

課題2：GWを体験して、言語学習観に変化が見られるか。見られるとしたら、どんな変化なのか

4. 研究方法

本研究は、北京市内にある某大学の日本語専攻の学部一年生を対象とした。GWは精読授業の応用練習の授業に取り入れ、一ヶ月にわたり、合計4回実施した。授業では教科書の文法練習の代わりに、GWの形で会話活動と翻訳活動を行った。

課題を明らかにするために以下のデータを収集した。まず、言語学習観に関する質問紙調査を、GWを行う前後に配布した。この質問紙調査はパイロット調査を踏まえた上で、4領域、27項目にまとめた。

そのほか、毎回授業の後の振り返りシートを書かせ、GWを体験する感想をフォローアップ・インタビューで聞いた。

5. 課題1の結果と考察

研究対象者の言語学習観を明らかにするため、課題1ではGW実施前の質問紙調査を分析データとして用いた。質問紙の各項目の回答平均値を項目の中間値に比べることによって、学習者はどんな態度を持っているかを見てみた。

各領域の結果を統合的にまとめて、以下の学習者の言語学習観像が得られた。

日本語学習の性質に対する考え方は大きく二つに分けられる。〈正しい日本語の勉強が大事〉、〈積み上げ学習が大事〉の認識と、〈実際に日本語を使って勉強することが大事〉、〈日本語を勉強するには多様な方法がある〉という認識。

〈正しい日本語の勉強が大事〉、〈積み上げ学習が大事〉という認識のもとで、学習者は教師の役割を大きく捉え、受身的な姿勢で教室に臨み、教室活動を知識獲得の過程だと考えている。このような認識は精読授業をはじめとしてこれまで中国で受けてきた教育による影響だと考えられる。一方、〈実際に日本語を使って勉強することが大事〉、〈日本語を勉強するには多様な方法がある〉の認識から、学習者は GW に対して、肯定的な意識を持っていることが窺われる。このような認識からは、新規学習活動を受け入れやすい可能性を示唆している。

6. 課題 2 の結果と考察

課題 2 では、GW を言語学習観に及ぼす影響を見るため、GW 実施前後の質問票調査の結果を T 検定にかけ、有意さがあるかどうかを調べた。

その結果、GW を経験することによって、各領域 1 項目ずつ、27 項目の中、4 項目に変化が見られた。その中、翻訳活動と関連している 2 項目は期待する方向へと変化し、会話活動と関連している 2 項目は期待に反する方向へと変化した。

なぜこのような変化が見られたか。本研究では、振り返りシートとフォローアップインタビューの内容に照り合わせながら、考察をした。

従来の精読授業は文法説明の理解とその繰り返し練習による暗記を中心に行われており、使用においては正しい日本語が求められている。このような授業を受講する学習者は正確な日本語の使用を非常に意識している。

GW の翻訳活動の場合、学習者は活動前、活動中、活動後のどの段階でも日本語の正確さを自ら確認することができるが、GW の会話活動の場合、学習者は日本語の正確さを確認する機会が少ない。このように、翻訳活動は学習者の持っている言語学習観に沿った上で新たな刺激を取り入れたため、GW によ

り好意的な方向へと変化しているといえる。他方、会話活動は学習者の持っている言語学習観からかけ離れているために、GW に抵抗が見られたといえる。

7. 示唆と今後の課題

本研究の結果から、精読授業に GW を取り入れるには、受講生の持つ言語学習観を十分考慮に入れながら、GW をデザインする必要があることが示唆される。

このことは、中国国外で有効とされた学習活動をそのまま精読授業に導入しようとする動きが顕著になってきている中国の日本語教育においては、特に重要である。実証的に導き出された本研究の結論は、精読授業の改革方向性を議論するに際して示唆に富むものであると考える。

今後の課題として、まず GW の会話活動の改善が望ましい。次に、長年教師主導型の授業を受けてきた学習者に GW での自律性を促すために、教師からの働きかけとともに、学習者自身による内省活動も望まれる。更に、GW を精読授業に取り入れることによって、日本語学習にもたらされる効果を検証するために、長期的な実証研究が望ましいと考えられる。

主な参考文献

- 板井美佐 (2000) 「中国人学習者の日本語学習に対する BELIEFS について—香港 4 大学のアンケート調査から—」『日本語教育』14 日本語教育学会, 163-179
- 岡崎眸 (1996) 「教授法の授業が受講生の持つ言語学習についての確信に及ぼす効果」『日本語教育』89 日本語教育学会, 25-38
- 山本そのこ (1999) 「中・独日本語学習者のピリーフ比較 BALLI 調査をもとに」『拓殖大学日本語紀要』9 拓殖大学留学生別科, 91-107
- 白杵美由紀 (2002) 「学習ピリーフに関するインタビューをもとに：学習ストラテジーと学習者・教師の役割」『JALT 日本語教育論集』6, 9-18
- Cohen, E. (1986) *Designing groupwork: Strategies for the heterogeneous classroom* New York: Teachers College Press